

# 祭の晩

宮沢賢治

青空文庫



山の神の秋の祭りの晩でした。

亮りょうじ二はあたらしい水色のしごきをしめて、それに十五銭もらつて、お旅屋にでかけました。「空気獣」という見世物が大繁盛でした。

それは、髪を長くして、だぶだぶのずぼんをはいたあばたな男が、小屋の幕の前に立って、「さあ、みんな、入れ入れ」と大威張りでどなつていたのでした。亮二が思わず看板の近くまで行きましたら、いきなりその男が、

「おい、あんこ、早く入れ。銭は戻りでいいから」と亮二に叫びました。亮二は思わず、つっと木戸口を入れてしまいました。す

ると小屋の中には、高木の甲助だの、だいぶ知っている人たちが、みんなおかしいようなまじめなような顔をして、まん中の台の上を見ていたのでした。台の上に空気獣がねばりついていたので。それは大きな平べったいふらふらした白いもので、どこが頭だか口だかわからず、口上言いがこつち側から棒でつつくと、そこは引つこんで向うがふくれ、向うをつつくとこつちがふくれ、まんな中を突くとまわりがいたいふくれました。亮二は見つともないので、急いで外へ出ようと思いましたら、土間の窪くぼみに下駄げたがはいつてあぶなく倒れそうになり、隣りの頑丈そうな大きな男にひどくぶつつかりました。びつくりして見上げましたら、それは古いしろじま白しろ縞じまの単物ひとえに、へんなみの蓑みののようなものを着了、顔の骨ばって赤

い男で、向うも愕おどろいたように亮二を見おろしていました。その眼はまん円で煤すすけたような黄金きんいろでした。亮二が不思議がつてしげしげ見ていましたら、にわかににその男が、眼をぱちぱちつとして、それから急いで向うを向いて木戸口の方に出ました。亮二もついて行きました。その男は木戸口で、堅く握っていた大きな右手をひらいて、十銭の銀貨を出しました。亮二も同じような銀貨を木戸番にわたして外へ出ましたら、従兄いとこの達二に会いました。その男の広い肩はみんなの中に見えなくなっていました。達二はその見世物の看板を指さしながら、声をひそめて言いました。

「お前はこの見世物にはいったのかい。こいつはね、空気獣だな

んていつてるが、実はね、牛の胃袋に空気をつめたものだそうだよ。こんなものにはいるなんて、おまえはばかだな」

亮二がぼんやりそのおかしな形の空気獣の看板を見ているうちに、達二が又言いました。

「おいらは、まだおみこしさんを拝んでいないんだ。あした又会うぜ」そして片脚で、ぴよんぴよん跳ねて、人ごみの中にはいつてしまいました。

亮二も急いでそこをはなれました。その辺一ぱいにならんだ屋台の青い苹果りんごや葡萄ぶどうが、アセチレンのあかりできらきら光っていました。

亮二は、アセチレンの火は青くてきれいだけれどもどうも大だいじ

蛇やのような悪い臭においがある、などと思いながら、そこを通り抜けました。

向うの神楽かぐら殿でんには、ぼんやり五つばかりの提ち灯ようちんがついて、これからおかぐらがはじまるところらしく、てびらがねだけしずかに鳴っておりまして。(昌しょう一いちもあのかぐらに出る)と亮二は思いながら、しばらくぼんやりそこに立っていました。

そしたら向うのひのきの陰の暗い掛茶屋の方で、なにか大きな声がして、みんながそっちへ走って行きました。亮二も急いでかけて行って、みんなの横からのぞき込みました。するとさっきの大きな男が、髪をもじやもじやして、しきりに村の若い者にいじめられているのでした。額から汗を流してなんべんも頭を下げて

いました。

何か言おうとするのですが、どうもひどくどもってしまつて語ことばが出ないようすでした。

てかてか髪をかけた村の若者が、みんなが見ているので、いよいよ勢いよくどなつていました。

「貴様んみたいな、よそから来たものに馬鹿ばかにされて堪たまつか。早く銭を払え、銭を。ないのか、この野郎。ないなら何なして物食つた。こら」

男はひどくあわてて、どもりながらやつと言いました。

「た、た、た、薪百把持たきぎばつて来てやるから」

掛茶屋の主人は、耳が少し悪いとみえて、それをよく聞きとり



かねて、かえつて大声で言いました。

「何だと。たった一ふたくし串だと。あたりまえさ。団子の二串やそこから、くれてやってもいいのだが、おれはどうもきさまの物言いが気に食わないのでな。やい。何つうつらだ。こら、貴さん」

男は汗を拭ふきながら、やつと又言いました。

「薪をあとで百把持つて来てやつから、許してくれろ」

すると若者が怒つてしまいました。

「うそをつけ、この野郎。どこの国に、団子二串に薪百把払うやぶがあつか。全体きさんどこのやつだ」

「そ、そ、そ、そ、そいつはとても言われぬ。許してくれろ」

男は黄金きん色の眼をぱちぱちさせて、汗をふきふき言いました。一

緒に涙もふいたようでした。

「ぶん撲なぐれ、ぶん撲なぐれ」誰たれかが叫びました。

亮二はすっかりわかりました。

（ははあ、あんまり腹がすいて、それにさつき空気獣で十銭払ったので、あともう銭のないのも忘れて、団子を食ってしまったのだな。泣いている。悪い人でない。かえって正直な人なんだ。よし、僕が助けてやろう）

亮二はこっそりがま口から、ただ一枚残った白銅を出して、それを堅く握って、知らないふりをしてみんなを押しわけて、その男のそばまで行きました。男は首を垂れ、手をきちんと膝ひざまで下げて、一生けん命口の中で何かもにやもにや言っていました。

亮二はしやがんで、その男の草履をはいた大きな足の上に、だまって白銅を置きました。すると男はびっくりした様子で、じつと亮二の顔を見下していましたが、やがていきなり屈かがんでそれを取るやいなや、主人の前の台にぱちつと置いて、大きな声で叫びました。

「そら、銭を出すぞ。これで許してくれろ。薪を百把あとで返すぞ。栗くりを八斗あとで返すぞ」言うが早いか、いきなり若者やみなをつき退のけて、風のように外へ遁にげ出してしまいました。

「山男だ、山男だ」みんなは叫んで、がやがやあとを追おうとしましたが、もうどこへ行ったか、影もかたちも見えませんでした。

風がごうごうつと吹き出し、まっくろなひのきがゆれ、掛茶屋

のすだれは飛び、あちこちのあかりは消えました。

かぐらの笛がそのときはじまりました。けれども亮二はもうそ  
つちへは行かないで、ひとり田圃たんぼの中のほの白い路みちを、急いで家  
の方へ帰りました。早くお爺さんじいに山男の話しを聞かせたかったの  
です。ぼんやりしたすばるの星がもうよほど高くのぼっていました。  
た。

家に帰って、厩うまやの前から入って行きますと、お爺さんはたった  
一人、いろいろに火を焚たいて枝豆をゆでていましたので、亮二は急  
いでその向う側に座って、さっきのことをみんな話しました。お  
爺さんははじめはだまって亮二の顔を見ながら聞いていましたが、  
おしまいとうとう笑い出してしまいました。

「ははあ、そいつは山男だ。山男というものは、ごく正直なもん  
だ。おれも霧のふかい時、度々山で遭ったことがある。しかし山  
男が祭を見に来たことは今度はじめてだろう。はっはっは。いや、  
いままでも来ていても見附からなかつたのかな」

「おじいさん、山男は山で何をしているのだろう」

「そうさ、木の枝で狐きつねわなをこさえたりしてるそうさ。こういう  
太い木を一本、ずうつと曲げて、それをもう一本の枝でやつと押  
えておいて、その先へ魚などぶら下げて、狐くまだの熊だの取りに来  
ると、枝にあたつてばちんとはねかえつて殺すようにしかけたり  
しているそうさ」

その時、表の方で、どしんがらがらつという大きな音がし

て、家は地震の時のようにゆれました。亮二は思わずお爺さんにすがりつきました。お爺さんも少し顔色を変えて、急いでランプを持って外に出ました。

亮二もついて行きました。ランプは風のためにすぐに消えてしまいました。

その代り、東の黒い山から大きな十八日の月が静かに登って来たのです。

見ると家の前の広場には、太い薪が山のように投げ出されてありました。太い根や枝までついた、ぼりぼりに折られた太い薪でした。お爺さんはしばらく呆れたように、それをながめていましたが、俄かに手を叩いて笑いました。

「はっはっは、山男が薪をお前に持って来てくれたのだ。俺はまたさっきの団子屋にやるということだろうと思っていた。山男もずいぶん賢いもんだな」

亮二は薪をよく見ようとして、一足そっちへ進みましたが、忽ち何かに滑ってころびました。見るとそこらいちめん、きらきらきらきらする栗の実でした。亮二は起きあがって叫びました。

「おじいさん、山男は栗も持って来たよ」

お爺さんじいもびつくりして言いました。

「栗まで持って来たのか。こんなに貰もらうわけにはいかない。今度何か山へ持って行って置いて来よう。一番着物がよかろうな」

亮二はなんだか、山男がかあいそうで泣きたいようなへんな気

もちになりました。

「おじいさん、山男はあんまり正直でかあいそうだ。僕何かいいものをやりたいな」

「うん、今度夜具を一枚持つて行ってやろう。山男は夜具を綿入の代りに着るかも知れない。それから団子も持つて行こう」

亮二は叫びました。

「着物と団子だけじゃつまらない。もつともつといいものをやりたいな。山男が嬉うれしがって泣いてぐるぐるはねまわって、それからだが天に飛んでしまいうくらいいいものをやりたいなあ」

おじいさんは消えたランプを取りあげて、

「うん、そういういいものあればなあ。さあ、うちへ入って豆を



たべろ。そのうちに、おとうさんも隣りから帰るから」と言いながら、家の中にはいりました。

亮二はだまって青い斜めなお月さまをながめました。  
風が山の方で、ごうつと鳴っております。



# 青空文庫情報

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店

1988（昭和63）年12月10日初版発行

1990（平成2）年10月20日8版発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年6月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 祭の晩

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>